

## 日米関係を外交の中心に

大来 佐 武 郎

大平さんと私の付き合いはかなり以前に遡る。昭和十四年頃、私が興亜院華北連絡部（北京）に勤めていたとき、大平さんは興亜院蒙疆連絡部（張家口）にいて、この頃から大平さんを知ることになった。また戦後も、経済安定本部で私が官房調査課長をしていたとき、大平さんは大蔵省から出向してきて建設局公共事業課長だった。そんなこんなで、大平さんとは四十年間にわたる付き合いであった。昭和五十四年十一月第二次大平内閣で外務大臣に任命され、翌年の七月まで八カ月余、激動する世界情勢のもとで日本外交の舵取りを大平さんとのコンビで推進することになったが、昭和五十五年六月十二日大平さんの急逝で、ベネチアサミットには大平さんの代理で出席することになり、この八カ月間は私にとつてはとくに感慨深い期間となった。

大平さんが急逝された日の早朝入院先の虎の門病院にかけつけた私は「大平さんの死は殉職だ」と思った。近くから見ると大平さんは誠実な、シンの強い人だった。過密なスケジュールも、政局の激動も、全力を尽くして乗り切つてこられた。そしてついに倒れてしまった。もう少しなんとかならなかったものかと思つても、もう遅かった。「大臣になるのはまあいいけれど、総理大臣にだけはうかつになるものじゃないよ。ちがうよ君、これは……」いつだったか私に向かつて、なかばひとり言のようにつぶやいた大平さんの言葉が今でも耳に残っている。「日本というのは有難い国だ。自分のような四国の田舎に生まれた平民でも、場合によっては最高の地位につくことができるのだから」と自分でも述懐しておられたが、飾り気のない庶民的な人であった。

首相官邸でも無駄な電燈を消して回っていたのは有名な話だが、「電氣を消して歩くのは昔からの趣味なんだ。ぼくは生まれつき省エネルギー向きにできているんだよ」といつておられた。志げ子未亡人のお話によると、風呂の湯でも必要以上に多く入っているとこ機嫌が悪かったそうである。読書家で、暇さえあればいろいろな本を読んでおられた。談話もまた、世間では「アーウー」と揶揄する向きもあったが、そのアーウーをとってみるとそのまま立派な文章になっているのであった。国会答弁ではことに、慎重に一語一語を選ばなければならぬので、どうしてもアーウーがたくさん入ってくるのだということも、私も外務大臣をやってみてよくわかった。

また大平さんは基本的な問題については、明確な意見をもっておられた。たとえば、日中国交回復にあたっては、外相として当時の田中首相とのコンビで強力に推進され、日中間の平和友好が日本の将来にとってはかり知れない利益であることを確信してゆるがなかった。防衛問題については、「最小限の自衛力をもち、日米安全保障条約によりアメリカの核の抑止力に頼るといふ二本の柱は、戦後の日本国民が行った選択であり、これを安易に変えてはならない。行き過ぎた防衛強化論は慎まねばならない」といつておられた。そして、吉田学校の生徒の一人として、「日本外交の中心は日米関係にある」といふ故吉田茂首相の路線を忠実に継承しておられた。

昭和五十五年五月一日のホワイトハウス・ローズガーデンでの「苦しい時に助け合つのが本当の友人である」といつ演説、またその少し前に広島で「アメリカはもはや超大国ではない、強国の一つである」といつた演説に典型的に現われているように、アメリカの力が相対的に弱まったからといつて背を向けるのではなく、むしろそれだからこそ日本が自らの判断で、あくまでもアメリカを助けて世界の平和と秩序の安定に寄与しようというのが大平さんの信念であつたように思う。私が出版した『エコノミスト外相の二五二日』といふ本の内容は、すべて大平さんの想い出につながるものである。

(第二次大平内閣外務大臣)